

彌陀の光

彌陀の卷

前篇

彌陀光……………一

心情的解脱の光……………五

神人感合の境……………七

三垢……………一〇

後篇

佛智乃至勝智……………一六

要解……………三一

彌陀の光

彌陀の恩寵と人の信仰との感合の状態

彌陀の光は體一なるも人の心機は三能に頒て其用を殊にす。恩寵と信仰とは其體は異なるも、其感合する機能は一にして、自己の精神機能に致一的にす。知力には啓示と實現し、心情には解脱となり、意思には靈化と現じ來る。

啓示

是に三種あり。感覺的と寫象と理想との啓示なり。

(一)彌陀三昧に凝神し、彼の彌陀の實在が自己の精神に實現し來るとき佛知見開發して實在を證明す。

彼の實在を證明せんが爲に凝神し先づ直觀に自己の意識に現じ來るものは感覺的なり。先づ明相現るあり。或は錢の大的の如し。或は鏡面の大的の如し。或は瑠璃地内外

映徹せるを見、或は白毫の光、或は寶像相好光明等、或は佛大身を現し虚空に徧滿し、或は丈六八尺等を觀見する等は、定中の意識の所觀なりと雖ども悉く感覺的啓示とす。

(二)寫象的啓示。既に妙色莊嚴を觀じ已らば尙進んで彌陀の内證を觀す。謂ゆる四智十方等なり。一切智慧と一切能との徳と神聖態正義恩寵との屬性を以て彌陀の性徳を顯はす。大智慧の光明普く法界精神徧照して自然にして眞實に知らざるなく見ざるなきを觀す。起信に曰く、不思議業相とは智淨相に依るを以て能く一切の勝妙境界を作す。謂ゆる無量功德の相常に斷絶なく衆生の根に隨て自然に相應し種々に現じて利益を得しむるが故」とは是なり。

一切能とは起信に「自然に不思議の業種々の用あり。即ち眞如と等しく徧わく一切處に徧し又用相の得べき有ることなく、如來は唯法身智相の身第一義諦、世諦あることなし。但衆生の見聞に益を得るに隨たるを觀せらるる故に説て用と爲す。

一切智とは大智慧光明(心性不起)の義。徧照法界の義(心性見を離る)眞實識知の故に等。神聖態はこの神聖大智慧に觀する時は、絕對理性を觀すれば、自己の良心を醒覺して、道德秩序を發見し、神聖なる彌陀の聲を認識す。こゝに於て道德の根底はみな彌陀の光りなるを見る。彌陀の神聖光に合ふ時は自ら侵すべからざる神聖態精神となる。

光にあふて阿頼耶識の垢されば、

大圓鏡智。一切依正二報事理すべての法は悉く如來大圓鏡智の裡に病現するを見る。平等性智。第七意識の垢されば自他不二本性無我同一根底なるを知る。意識の垢滅すれば、彌陀妙觀察智を。謂ゆる能く諸法の自相共相を觀じて衆生に妙法を説て覺悟せしむ。

成所作智。五種識の垢を除けば佛の能く一切種々の妙用を現じて衆生を度したまふを觀す。

佛は十種の智力を以て一切衆生の是處非處と三業の所作業を知りたまふ。衆生の性欲の善悪を知りたまふ。

一、神靈態は勢能の智慧なり。是絶對理性にして神聖圓滿なる精神態光明なり。至精純一絶對にしてこの光り人の個人の良心と現じて道德的行爲自律的となすことを観すべし。

二、正義、是智慧の用となる光にしてよく不正をさけて正義ならしむ光なりと観すべし。

三、恩寵、我ら無明と罪惡によつて亡びたるものを正知見の眼を興へて回復せしむる、無縁の慈悲を以て諸の衆生を攝するめぐみの光なりと観せよ。

(三)法身觀。是彌陀の實體理性即ち法性法身なり。自性身は無始無終にして、一切の相を離れ、諸の戲論を離れ、周圍無際にして凝然常住なり。冥想的觀念、絶對理想なりと観すべし。

非空間非時間なると同時に遍空間遍時間、永恒當然、眞々如々の理性體なりと観すべし。此光能く衆生本性清淨にして同一根底にして彌陀の一分身たることを照知せしむ。是の如く心機能的致一に彌陀の實在を觀念的に證し明したるを啓示ともまた三昧發得とも名づくなり。

心情的解脱の光

此光は人の心情信仰には解脱の徳として顯はれ来る。人天然に感情に脱却ざるべからざるの惡素質具有せり。爲に靈福感する能はず。人の苦毒は因は罪業により起す。罪過は煩惱より起す。煩惱は迷妄顛倒より、顛倒は無明より起る。無明は彌陀の法身に乖離するより出づ。其實體根底なる法身に乖き無明となり迷て顛倒し、主我ならざるに我と執し、諸の煩惱諸の惡業を作り、苦毒を受け因果關聯して自ら解脱すること能はず。苦毒と罪惡の感情はもと眞理にはあるべからざるものを自ら迷て苦と感

五

す。樂顛倒即ち主我幸福主義なり。人は天然としては本能に幸福を追求め常に渴望して止ことなきも満足念なく所謂苦々壞苦行苦止ことなく實に天然幸福主義の爲には満足を得べきものにあらず。何故に斯く苦は我が情に反して我を逼遇するやとならば斯る苦毒は自己罪業因果の關聯としてまた顛倒妄想より起る。

我に非ざるを我と執し苦の因をもて樂を迎へ、無常の規定の中に在て常住を求め、得べからざるものを得んと渴望し畢竟依屬に足らざる世界に依屬し、天然意向が眞理に反せるより顛倒妄想がおのづと苦毒を感ず。此煩惱罪業は是脱却せざるべからざるものなり。之を垢と云ふ。眞理に有べからざるもの、心情の垢によりて罪過と苦毒と顯し來るなり。此垢不靈福の垢は譬は粃米の糠糶あるが如く之を脱却するに非ざれば靈福を感ずる能はず。宗教の見地より見れば苦毒はもと彌陀に乖離し自ら歸すること覺らず。自ら脱却せざるべからざる煩惱なるを識らず。之を覺醒し脱却すべき意志を醒起せんが爲の豫報として感せしめられたり。身に老病死の苦惱なく愛別怨憎の憂愁なき時は、心靈界を放求する動機なし。煩惱と罪過との感情なければ靈福を欲望する期なし。苦毒と罪過の感情いよ／＼熾なれば、解脱の怖求も隨て深からん。苦毒と罪過とは心の垢穢より感ず。この垢穢を解脱するに非ざれば靈福を感ずるに由なし。之を脱却せんと欲せば自己本能の力の能する所に非ず。但だ彌陀の恩寵に依屬するの外に道なきを信じて彌陀に依る。他に依屬に耐ふべき方なきを識るとき、初めて至心に歸命信順の信仰おこる。自ら能はざる解脱を恩寵によつて脱却せんことを認識せばたとへ生命を犠牲にしても救靈を乞はざるべからず。主我を執して煩惱の奴僕となりてまた無常のために啜食せられ、空しく黑暗の中に埋没しなんこと必せり。如かじ身命を捨て、靈光の中に投じて信順して彌陀の靈光と融合せんに。

神人感合の境

深く三昧に入りて神秘的に心機能的に合一したるこの妙遇はいかでかこの天機を洩し

七

之が消息を他に傳へることを得ん。植物は陽春暖和の氣候をまちて爛漫たる美色を呈し微妙なる香氣を發し無意識ながらに天機感合の妙遇をあらはし、人は肉殼を有せる高等動物なれば窈窕たる淑女羅縠思服の春巫山の夢、天機の妙あり。斯の如き垢穢迷妄なる地球上肉の比例を以て鬼天無極を超越したる超天然真神靈的信仰神靈的感合の妙遇に例せばこの土地と無限の天空との比較も比とするに足らず。

天然の機制の我を亡して絶對的彌陀真我の中に投歸す。眞實最深の我は無我の我、入我々入。謂ゆる水を海中に投ず、風中に葉を鼓するが如し。初めて此妙境に入るや言語道斷、八面玲瓏、歡天喜地。導師曰く、定中に在て此口を見るとき三昧定樂を得て身心内外融液して不可思議なりと。又曰く、想心漸く微にして覺念頓に除き正受と相應して三昧を證し眞に彼の境の微妙の事を見る。何に由てか其さに説んやと。楞嚴に曰く、即ち佛心と交感し佛の氣分を稟くること譬へば中陰の身が自ら父母を求むる如く、陰信明通して如來の種に入り道胎に遊んで親しく覺胤を奉ずとは蓋し此妙遇を洩されたり。

吾教祖此聖經を説んと欲するときに臨んで爾時世尊姿色悦豫し光顔巍々として威神極りなとは教祖が彌陀三昧の中に彼の靈光に感接し内容に充盈せる妙貌が自づと外貌に現なれて其反映として、阿難を感せしめたり。實に今日世尊が姿色清淨にして光顔巍々なる鏡の表裏に暢るが如しと。いかに教祖が容に感じたる觀念の深さと廣さとはいかばかりぞや。此時教祖が精神的形式をして衆生に示現しなば盡十方無碍光如來盡空界重々無盡の莊嚴海を顯現し、これ教祖が我らが爲に彌陀に對する感合の内容を先づ最初に示され玉しものなり。

已に主我幸福主義の惡素質を脱却し精神彌陀に融合し安立せる時は清淨安樂自在常住の眞理の靈界に精神安住するが故に八風の爲に動搖せられず。苦も憂も感ずるに足らず。

三 垢

智力垢——不正知見
 身見。果報の上にはあらはれたる依身を我と計す。
 邊見。靈魂は斷滅すとかまた常住とか一邊を執す。
 邪見。因果を撥無す。
 取見。劣を取して自ら勝と計す。
 戒見。非因を因と計し非道を道と計す。

貪慾
 肉慾——眼耳の慾、營養生殖の慾を貪り不攝生放蕩等をなす。
 我慾——我意を張りまた己のみを厚うして他に害を與へることをおもはず。我見我愛等なり。

心垢
 瞋
 愚痴——非理又いかり。
 事理にくらく己が非なるも却て他をうらみ、迷ひ愛すれば惡きをも惡しと感せず。憎めばよきことをもよく感せず。みな迷なり。

我慢
 我
 惡意地。
 非道德方面に向ふ情操。
 主我を主張し世俗幸福主義

意志垢
 卑劣。
 世俗情操は卑劣にして主我幸福を貪り高等なる聖靈態菩提を汚す
 淨世執着

世俗情操を——聖靈態菩提心に
 世界的動機を——上求菩提願作佛心に
 卑劣志操

世俗的情操といふて人の天然は意志の垢ありて神の神聖態に適應ぬ惡素質あり。譬へばもと眞金の鑛垢の中にある如く、之を除き去るに非ざれば金性は顯はすこと能はざる如く、如來性諸の煩惱野卑の垢に覆はれて神靈態を覆ふ。未だ高等なる宗教に

よりに精練せざるもの、情操は高尚なる理想もなく、神志節なく寔に野卑なる人間の情操をいづること能はず。

世界的動機

娑婆執着と名づけ浮世に執着して意志が欲望する處感覺的欲望にして、或は名譽權威を貪り利を求め榮華を望み、すべての望みこの現世物質界を超えて、目的を心靈界に求め望を神の國にいたすことを欲せず。況や願作佛心に於てをや。

我執

主我執著なり。人は本能幸福主義なるが故に之を恣にして生育するときには我慾のみ主張し、自に利あらんかぎり飽までも欲望し他を安じ衆と利を同ふせんと欲するの志なし。

之を意志の垢と名づく。此靈光によつて天然意志の垢は是皆なみだの意志に適せざるものとして排除するは消極の方面なり。

此光によりて從來の天然精神を超越して道德力行をさはるものを除かば自由意志なり。是よりは意志を二面とし自己と彌陀の意志となり、自己は惡の本なるを以て常に自己離脱に自克につとめ、彌陀の意志實現に進むべし。彌陀の意志とは神靈態。この神靈に化せんが爲に常に意を注ぎ靈化すべし。靈化といふも極めて鞏固なる道德に外ならず。

善心生ず。意志の垢即ち彌陀の神靈態に適せざる惡素質脱却すれば彌陀の神聖同化の意志として鞏固なる道德態となり來る。

意志の垢を排除して靈格を成さんと欲するには勇猛なる意力を以て之を碎礪せざるべからず。譬へば鑛垢を去つて金性を顯はすが如し。天然の自己は鑛垢にして靈態は眞金の如し。世俗情操と世界幸福執着をみな破り利己主義を排除せんが爲に上十二光の聖徳に意を注ぎ、この聖光は悉く我等を靈化せんが爲の光明なれば、この彌陀の觀念を實現せんが爲に欲する願望。この道德的動機の最上衝動を道德的情操と名づく

く。この願望を道德的最上衝動とは即ち聖靈態菩提心なり。菩提心とは即願往生の心なり。願往生心とは願作佛心なり。願作佛心とは願度衆生心なり。是上求菩提下化衆生の心常に彌陀に安立せる精神彌陀の圓滿なる意志實現とし行動し自己が彌陀に神聖化せられる如く一切の衆生をも悉く彌陀に攝化同化せられんことを願望し、衆生をして之に同化せしめば精神的安寧を得べし。

彌陀の靈化の意志は神聖正義忍辱勇猛一心寂靜慎謹精進智慧等となりて活動す。慈悲正直清潔清麗節操正語溫柔恭儉。

圓滿なる至高善は彌阿彌陀尊のみ。彌陀尊の至善は之を知ること能はず。超人間なるを以て之を寫象すること能はざれども、教祖釋尊の人格を以て彌陀の意志實現として生活々動せるを以て、比例して超人格の統一せる彌陀尊の至善をしろのみ。教祖は世俗的情操世界的動機主我執着已に脱却して人格としての圓滿なる彌陀靈化の意志として生活したまへり。彌陀は主我的幸福を脱して精神的靈福一切をして普く安寧ならしむるにあり。

善とは人は惡素質垢を脱し充分に精神及び身體の諸能力を發展せしめ人類を悉く安寧ならしめんとする意志なり。人間最深の機能まで發展せしむる時は自己に安寧を得るのみならず他の關係も益々親密ならしめ人格としての圓滿なる精神生活を得らるゝにあり。

佛智 乃至 勝智

一六

大經に若有衆生、明信佛智、乃至、勝智、作諸功德、信心回向、此諸衆生、於七寶華中、自然化生、跏趺而坐、須臾之頃、身相光明智慧功德、如諸菩薩、具足成就。

明信佛智は客體の智見を與ふるを主體の信仰寫象が開示せらるゝ故に、彌陀と衆生の心機能的交渉にして、佛智見を與へられて寫象的信機開展することなり。觀經には初めに感覺的に依正の莊嚴の事相を心機能に觀見す。今經には寫象の彌陀の佛智を觀念的に交渉して佛智見を與へらるゝなり。

初に五智の本質定相を明し、次に衆生の方面なる心機を説き、次に心機と關係の狀態を論せん。

佛智等の五智を法界體性智の五智に配當して説ときは、其本質定相明了ならん。依て之に配して説明せん。佛智は法界體性智なり。體性智の本質は即ち本覺真心にして絕對精神態、遍時間遍空間永恆實存の本體なり。個體精神の如は物質及生理規定にのみ必要な感情等の心理素質知力にても個體には不正なる知見無明等あり。純然たる理性態にして少しも異質を雜ざる心體なり。

衆生の心機のすべての素質を排除し純粹理性のみを抽象せばこの無限の理性の個體なると相應すべし。佛智は眞智眞智は無智、自然智、意識的に省慮せず、一切の處に周偏して物と體を一にして、個體が彼を此に寫象し省慮して意識するが如きに非ず。一切事物の自爾法界體性の其まの智なり。一切の處に周偏せる實在なるが故に我等個體は、其體性智に統一せられたるを自らしらす、絕對精神の個體なるを以て自ら根底に向て絕對觀念に心を留め純理性のみに（）せば、自己の精神は絕對の精神内たることを識らん。我らは最深の法界體性智を根底とせるなり。

絕對無限の心體なるを以て内外あるなし。斯く彌陀性智を自己精神の根底とせるも天然無明の心理素質に覆はれて自ら識らす。一心を彌陀の無限の光に歸し信仰の關係

一七

の中に致し。

不思議智は大圓鏡智。已下は體性智の屬性にして其本質は體性智なり。譬へば體性智は鏡の本質にして鏡智は鏡面の映徹して裏表に暢して萬物の影を映現する。等智は萬物の現象は異なるも其性は同じく鏡にして。觀智は現象の性質を明かに瞭識して佛智見を開示し。作智は能力にして鏡に觀智は見るものをして其面像の不正を端し、作智は不正を端する如し。

鏡智は體智の相にして即ち一切慧と稱すべし。本より絕對の心の明鏡の表裏に映暢せる如く、佛の智は寫象は一切の處に周偏して法界の萬類はこのまゝ佛の鏡智の内なり。個人此にあつて彼を寫象する如にあらず。一切は悉く佛の心智なればこのまゝ、十方法界のまゝ、が鏡智に映現せるまた物象も衆生の種々の心象も悉く是如來の鏡智の（）現にし、

超然たる彼處に大圓鏡に映現するものに非ずして彌陀遍一切處の鏡智に映現したる一切の物心二現象なり。是を識らすして不如理の心象を現じて自ら醜惡の相を現じて愧づ。一切の衆生が悉く佛の慧の中の現象なり。

自ら深く觀すべし。無限の大圓覺智の中に映現せる我身及び心象なるを。我ら個人の精神も同じく彌陀鏡智の無邊の鏡智の表面個體にして精神の觀念内容は無限にして我らも法藏の分子なれば、識認にも、眼を擧て見れば、首經に在るが如し。色身より山河虚空大地にに泊まで成是妙明真心の中の物なりと。此世界現象は悉く目を開きて見れば認識界にして、寫象的に見れば悉く無邊の空間も悉く自己の觀念界のに包含す。我らが藏性彌陀の觀念に開展せらるれば山河大地宇宙の現象界も心の觀念（）裏の映現せる不思議の智はわれら腦裏に實現せるを以て佛智の實在を證明せり。我らは本然に此藏性をうけこの理を識れば宇宙現象は我らが寫象界なるをせる。我ゆかず幾億萬里の天王星に意は達す。彼來らず。天王星は我意識内に在り。十方各爾り。不思議智の實在を寫象に現せり。彌陀實在せり。無限の光は實在なり。清淨本然なり。造作に非

一九

す。不思議智は體性智の屬性として、清淨本然にして實在せること、精神には直接に、客観には間接に、識らすべし。斯の如く真理の智を信せずして妄想分別の影像なる主我に執着して彌陀の實在を識らすして冥に入るは愚ならずや。

不可稱智は平等性智

一切の衆生、性質は世界と生理規定との世界素質の爲に種々の性質を異にするも、其れは世界物質と種々の關係によつて各々特殊の性と成りしも、また原始的無明と惑との心理素質は覆深するも、一切衆生は其最深の根底にいたつては一元理より現出したるに外ならず。即ち法身如來藏性より、絕對精神の一元なり。故に本性は同一の絕對理性なり。この理性を根底とせるを識らす。迷に迷を累ね實我實法を執してとげす。

物質元素の假合物なる身と天然生理規定の主我に執して自己の根底をしらす。原人論に論ずる如く、或は大道元氣、或は業、或はあらや等を、若し是らを根底とせば平等性には達する能はず。個人最深の根底は如來藏性にして一切の衆生悉く同一の理性なり。故に之の性藏を開展して最終目的に無限光壽に到達するを目的とす。之をしらす個人の天然規定と個人の因果を基礎とするものは、絕對真理の眞理の目的に副はざるを以て迷とす。この絕對眞神は一大眞理の目的に向て進趣する勢力ありて、個人をしてこの終局目的に解脱し致一して、眞理の終局に宇宙樞機の妙理に契合せしむ。この世界の方面より見れば天機の妙いかなる哲學者も説明すること能はざる造化の妙機科學は妙機の迹を分析的に研究するのみ。萬物造化の妙機は説明する能はず。

然るに信仰には自己は法藏性の現象なる個體なるを以て自己を其根底なる性智に投する時は、無限眞理の光なる彼に信順して依屬する時は自然法爾として絕對眞理に稱つて終局目的に、眞理の内規と契合して、此個體の迷より絕對の平等性智に止揚せらる。佛智に依屬するは絕對眞理の目的にして個體の罪福因果のみを識は個體の因果目的のみにして、宇宙の内規を識らざるものなり。神の目的に順ふものは眞理に順するが故に化生す。この義甚深説明の能くする處に非ず。但し信仰のみあつて契合して眞

理目的に契ふ。

妙觀察智——大乘廣智。

大乘とは其體周徧法界の體

法界に周徧せる智は衆生の心機に關係に實現して衆生の信機を開展して佛智見を與へて佛の内容を秘密の内容を開きて衆生と迷とを覺して、佛の心の無限光の實在を知力に實現せしむる處の智力にして、この智力の實在は法界衆生の精神界に實現するものなり。この機能は衆生の心機にして主體と客體にして、衆生の心機を離れて佛の心の實現する機能あるなし。彌陀の佛智は爲物の恩寵にして衆生に信仰を開展して佛道と相應せしむる功能なり。佛自己の衆生を寫象（）功能に非ず。衆生の心機に關係して信仰開展して佛知見を與ふ處の智慧なり。

客體 主體

體智 主質 精神 本質 體智

鏡智（屬性） 寫象 觀念 鏡智（普遍的觀念論的形（而）心

性智（全智） 理性 性智

察智（全智） 智力 意識的 察智 心理啓示

作智 全能 意思 實行的 作智 解脱靈化

首楞嚴に清淨本然にして法界に周徧せる（）如來の妙觀察とは此智體に一切慧に人の心機を開發すべき勢能なり。佛正徧智海は心想より生ず。彌陀の觀念に凝神し、察智は人の心機に關係して、佛知見として開發して、佛智の實在が人の心機に實現すべき理にして、其關係の三昧中に感覺的には明相瑠璃寶地及び相好依正の莊嚴と現じ來り、寫象的には佛心の神聖正義恩寵と現じ來り、理想としては清淨法身智相一切處に周徧し等。如來は心色不二にして、心法界に周徧せるが故に色法界に徧す。色心不二にして實相無相にして不可思議の相を實現す。察智との關係には、衆生の智力心機を開示して、精神界中秘密の藏を開きて、靈界の妙色莊嚴即無相にして、無相の相は妙色莊

嚴なる中諦の理を實現す。全宇宙は天然現象のみに非ずして精神的靈界にして、是寂光淨土なることを。娑婆即寂光にして當處即蓮華藏世界たることを。觀經に云く、去此不遠。淨土の妙界を覺るは是察智のしからしむるなり。

大乘廣智とは佛智一切處に周徧して佛身心ならざる處なし。然に衆生天然の感覺世界のみを見て、全宇宙が此まま佛の身心なり。常寂光土なり。衆生は是を識らずして感覺のみを識る。大乘廣は察智は大乘の體は十方法界悉く彌陀の身心、一切處悉く淨土、察智は之に知見を與へて其大乘廣を識らしむ。

衆生信仰。此絶對の内容は一切の衆生を終局神の目的に運載せしむる契機なり。然るに衆生個々の妄想に目的を立て真理の目的を識らず、六道に流轉す。最深の基礎たる絶對の内容には精神的に一切の個體精神を、真理の軌則に持して真理の目的に運載する契機なり。個人の精神目的を犠牲にして絶對の真理の目的に乗せよ。依屬せよ。大とは絶對の眞神、乗とは個人精神を運載して終局目的に運載する義。經に、その國土清淨なること斯の如し。何ぞ力めて善をなさざる道を念するは自然なり。

察智は佛知見開示して智力的に彌陀の實在の實現として信仰に入るものは察智と衆生の心機と致一したるなり。

無等無倫最上勝智は成所作智。如來の意志即ち全能力なり。衆生の方面には意志の信仰たり。如來の此智との關係には衆生の心機心情に如來の勝智に適せざる心情の惡素質あり。所謂罪惡と苦毒の感情なり。人は天然としては根本的に幸福を追求むるも老病死等の苦々壞苦行苦等のあるありて欲望する幸福を障害し、道德主義より見れば貪欲瞋恚及び三業の罪惡ありてこの感情罪惡の爲に。之を如來の勝智に順する時は人生の目的は幸福のために非ず。主我に非ず。神の眞理の目的に。罪惡素質は鑛璞より金玉を鍛鍊し出すが如くこの苦の毒の中に忍耐し、罪惡との健闘に勝利を獲せしめ、人は法藏の個體精神なれども、苦毒と罪惡との素質の覆ふことは、琢磨の功と精進の功によりて最深の中心を顯はし高等なる進化發達の中に其神聖なる稀有なる幸福を

與へんが爲なり。若し天然の發達にして天然的終局ならば最深の眞理も神聖とするに足らず。一切の靈福も聖徳も甚深微妙も高遠の理想も無上の覺もあるなし。獲難が故に稀有天然を超絶せる甚深微妙あり。一切の道德も至善も至美も靈福も天然の非眞と不靈福の爲に其莊嚴を顯はす。至神は法身藏より個々の一切理性と及び肉によるの無明罪惡の皮殼を賦與し理性と自由意志とを與へ、其神聖なる最深の中心を現はさん。甚深微妙を顯はさんが爲に、恩寵により精修力行によるに非ざれば眞理の終局に達す能はざる理由を覺らしむ。

若し天然に本覺のみならば、彌陀の恩寵も神聖も必要あるなし、宗教も道德も要なし。斯く個々に理性と自由意志とを與へられ無明と罪惡と苦毒の質を脱却のために與へ、悉く佛智乃至勝智、恩寵もこゝに於て需要なるをしらん。

人宗教によつて佛知見を開示し、勝智によつて心情の素質脱却し、彌陀の勝智に融合し安立し情操變化の意志として、成作智は彌陀の聖意實現として行動するは是勝美なる徳なり。無等無倫は道德的情操にして人の意志に世俗的情操を脱して志節高尚潔白なるは無等なり。世界的動機、世福的欲幸福欲望は()て最深の欲望無上覺の欲望は無倫なり。主我執着を脱して彌陀の眞我精神生活となりて彌陀の意志實現たる行爲力行は勝智なり。

消極としては一切の惡を脱し積極には菩提靈化の意志とし力行すべし。法藏の願意習ふべし。軌とすべし。

布施と調意戒忍精進一心と智慧とは終局目的に行せん。道を求めて堅正にして却かざらむ。願を彼に發して所欲を力精せん。たとひ身を諸の苦毒の中に止むとも我行精進忍で終に悔ひじ。

大經 彼佛國に生せる諸菩薩等已下は彌陀靈化の意志を明す。
佛智乃至勝智と幸福を信す。

佛智は絶對なる彌陀の方面にして幸福は個人的。佛智は絶對精神全宇宙の本體は佛

の本體なり。其本質に真相と性とは全智と理性態と活動との屬性あり。即神に全智全能なり。之を哲學者は法身を本體、勢力を宗教眼には是を神の本質と全智全能とす。世俗論者は世界を世俗的に見て宗教眼よりは實に全宇宙の本體は法身如來藏性にして其秘奥を開展せば無量光壽即ち無限の神質に一切慧と全能力との神なりと見る。此絶對なる真神には真理目的あつて一切萬類を攝護し其の精神心機能を開發し惡素質を脱却し高等に神靈同化して秘密の奥に入しめんが爲なり。故に此世界因果の萬物は因果律に支配せられて個々の目的の上に真理の目的の神の目的を識らざるも神には最深の内容に終局の目的に進向する秘奥あり。之に個人の目的を犠牲にして、神の目的に歸順するものは完全圓滿な真理の精神生活なり。真理の目的に協ふなり。これを佛智乃至勝智を信す(一)

此絶對精神なる彌陀 佛智を以て一切を開示して終局目的に攝取せんが爲に諸智を以て一切を攝取せんとするも、斯の如くの宇宙の最深の真理を知らず個人的天然律の因果罪福を信じて個人を中心として世界的因果律倫理の根底に立て善本を修して進んで彼國に生せんと欲す。生とは更生にして二種あり。精神更生と身質の更生なり。

心理更生は必しも身體に關らず。精神が天然の主我主義本能的を超越し個人の主我を犠牲にして絶對の眞神の目的に歸順す。従前の主我を轉じ全く彌陀眞我の中なる我の外に我なきを意識し其目的に向て生活々動するに至らば心理更生したるものと云べし。

眞に更生したる上は眞我の中の生命にして化生と云べし。化とは從來の天然主我の意象變じて高等なる彌陀の生命に靈化したる精神態也。七寶華とは信心華開發したるすがたなり。身相光明智慧功德諸の菩薩の如くに具足し成就す。七寶華生は佛知見開示したる(一)身相光明智慧は信仰開發したる上の精神内容にして功德は意志實行の信仰なる、彌陀の意志實現として行動するの生活なり。

胎生とは信心開發せざる精神内容は主我幸福主義を脱せず。精神彌陀の光明中に解

脱靈化の意志として生活すること能はず。佛を見ずとは、已に開發したる精神は當に彌陀を拜し妙法を聞き三業自ら菩薩の法式に順ず。然るに主我天然は自己の内容に彌陀實在せず。

要 解

要解に阿彌陀佛は是萬徳の洪名、名を以て體徳を召す。罄て盡ざることなし。故に即ち執持名號を以て正行と爲す。必しも更に觀想參究等の行に涉らず。至て簡易至て直捷なり。聞て信じ信じて願ば乃ち實て執持す。信せず願せざるは聞かざると等し。聞慧と名けず。執持は念佛の名號を憶ふ。故に是思慧なり。然に事持理持あり。事持とは西方の阿彌陀佛有ことを信じて而も未だ是心作佛是心是佛。今日主體客體機能の致一但志を決て願て生を求を以て故に子の母を憶ふ如く時として暫くも忘ることなし。理持とは西方阿彌陀佛は是我心具是我心造と信じ、即ち自心所具所造の洪名を以て繫心の境と爲、暫くも忘れざらしむ。今日自心具心造といふは自己の心理の根底同一體の故に、諦に分つときは、自己の根底に本づきて心具心造と云。本末を誤るなけれ。根底本體は本阿彌陀なるを以て、自己も阿彌陀の根底より出たる個體なれば、

一心も亦二種。事持理持を論せず、持て煩惱を伏除し乃至見思盡に至るは皆事の一

心。事持理持を論せず、持して心開て本性の佛を見に至ば皆理の一心、事の一心は見思の爲に亂されず。理の一心は二邊の爲に亂されず。即ち修慧なり。乃至當に知るべし。執持名號既に簡易直捷にして仍至頓至圓なり。念々即ち佛なるを以の故なり。觀想を勞せず、必しも參究せず。當下に圓明にして餘るもなく欠るも無く、上々根も其間を超えること能はず。下々根も亦其域に到るべし。

一日至七日は辨事を廻期するなり。利根は一日に即不亂鈍根七日方に不亂等。導師觀經疏日觀の下に其利根の者は一坐に即ち明相現前を見る等、又一日乃至一年二年三年等とあり。時間の久近を論せず、要らく心機開展の證明として啓示に接せんことを。

要解。流通分、信願持名の一法圓に收圓に(超)一切の法門豎に一切法門と(渾動)し横に一切法門と迥に異り、既に無問自說誰か偈募流通に堪ん。唯佛と佛とのみ。乃ち能く諸法實相を究盡す。此經唯佛の境界唯佛と與に流通すべき耳。

最高等宗教意識の歸する處此法門を捨て何れの處に求めん。宗教客體光明横に空間を盡して餘りなく、豎に三際を徹して遺なく、不可思議妙用有て常恒に衆生を攝化する。是の客體を離れて何にか圓滿なる宗教客體を得ん。是れ自然の歸する所と謂んか。將た究竟實相と謂んか。此土の教主此究竟の眞理を以て實行的宗教の法門とす。其他の大乗の佛教は此眞理を學說として研究すべき宗義學として研究せしむるにあり。

斯土の教主の宗教的本懷此に有如く己を推て他を察せよ。
現象界の世界空間無限の中に無量の世界有と假定せよ。晴霄自ら觀るに無邊の星界恭列せるに非ずや。肉眼の及ばざる處幾層かあらん、或は無盡と云、或は恒沙と云べきのみ。

星界發達進化せし精神生活的有情の住すとせよ。亦大宗教開覺者ありて宗教的活眼を開きて精神生活的生物を濟度すとせよ。宗教意識完全圓滿に進化せるとせよ。宗教的究竟實相即ち眞理此法門を離れて何を以て宗教を建つるを得ん。
「阿彌陀に(反)して神は無明慧なり。無智なり」

リ不正義なり。生成するものなり。慈悲なき衆生を捨離するものなり」

濫りに推測的理窟こゝに至る却て益彌陀の神聖を瀆すの畏れあり。是非惡(なり)、深く愧ちさん悔す。ナム。

舍利我今阿彌陀佛不可思議功德之利

要解。不可思議。略して五意あり。一、横に三界を超て斷惑を俟す。

(三界とは現象界、超るとは即ち靈界、今世界依處の心を捨て、直に絶對的靈界に歸せば、斷惑を俟すとは主我彌陀に歸命せば煩惱自ら亡す。巨魁已に降服すれば賊徒自ら隨ふ。何の憂かあらん。)

二、西方に即して横に四土を具す。已に西方とは即是靈眞理界の稱。靈界四土具せざらんや。

三、但持名號不假禪觀諸方便。名は體を召す。名に依て其體を體達して自己離脱す。何の方便か假らん。

四、一七爲期不藉多劫多年月。彌陀本自實在彌陀現前すれば我亡す。日東に上れば闇滅す。

五、持一佛名即爲諸佛護念不異持一切佛名
十方無量諸佛同一根底。今統一的權彌陀にあり。統一的彌陀を念すれば諸佛に全通す。空間に一切の星宿を攝する如し。

此皆導師大願行の成就する處故に阿彌陀佛不可思議功德の利と云。又行人信願持名全く佛の功德を攝して自の功德を成する故に。

是諸佛釋迦皆阿彌を以て自と爲。

此釋最とも巧妙なり。阿彌陀は周遍法界の實在即ち神聖的實在、諸佛の内容悉く阿彌ならざるなし。形式も亦然り。内面に於て然るのみならず三業の所作一切の行動悉く彌陀の實現ならざるなし。斯の如く云はゞ彌陀は法身のみにして報身なきやと疑ふなかれ。報身は報身の格を改めずして實體及び彌陀の勢能とは十方に充滿して諸佛の

身となつて活動す。此眞理を知らんと欲せば彌陀と關係の活眼を開きて自ら觀せよ。

舍利弗不可以小善根福德因緣得生彼國

教權文字の葛藤に陥らざる利あり。僞真空理に陥らざる利あり。我慢主義に陥らざる利。消極(真空)のみならず微妙()相莊嚴を觀見する是利、彌陀によりて知力證明のみならず感情融和の利樂を()

佛知見を開示し佛の正道に入らしむ利。法身と同一根底たることを覺る利。彌陀の神靈正義智慧慈悲等の徳に同化する利。念々念に應じて應身に感接する利。心情不可思議的に融和利樂を得る利。無礙光に常に安立して無畏の利。無量光に依り自己の過患を知る利。彌陀光にて聖徳發顯す。永恒の壽とし亦無量の生命に完全たる精神生活する利。十方諸佛と同一根底とし統一なる彌陀と分化個體して分に應じて活動を得る利。至眞至善至美の徳性に同化せらるる利。常住安樂自在清淨に徳化せらるる利。心理機能的に同化せられて同じく無量光壽の名を得る利。心歸命して自己亡じて彌陀化する利。觀念的に致一し個體として彌陀を顯はすを得る利。自己の觀念内容の彌陀十方諸佛と互に讚嘆する利。最大の希望與へらるる利。終局目的として常恒不斷彌陀化して十方衆生を攝化する利。高遠なる理想與へらるる利。道德制裁せらるる利。日々歡喜禪悅の食。光に懺悔の衣。

無量無邊不可思議の利、一々枚擧するに遑あらんや。日々念々無上の大利。吾人が()意識に入り來る利。念々不可思議なり。況や圓滿なる宗教的至人が心眼に常に受用しつゝある大利。若し色相あらば無盡重々に十方界に充滿。

吾人が大利を得何の幸福か之に比せん。大利をして空しく不誠的に放置するは實に惜むべし。早く活眼を開きて意識的に()。

廣長舌相覆三千世界

十方諸佛各牟尼が所説の彌陀の眞理を證するに三千界に覆ふ。然れば十方界其證明の舌相微塵も充滿せざる處なし。蓮(池)大師曰く、又十方とは且く横に就て説、若し

際に説は三際に通じて讚嘆せざるなし。

彌陀の眞理法界に充滿して實在せざる處なき故に、其實現として諸佛出現せるに非ずや。諸佛の三業四儀悉く彌陀を顯現するなり。有佛無佛性相常住、彌陀の眞理一處として充ざるなし。諸佛證せざらんと爲と雖ども眞理夫れ覆ふべけんや。彌陀の遍在を證するに有情に約して論せば有情信仰成する時は常に彌陀現す。信なき時は實在すれども現せず。日は照せども眼なきに顯れざる如し。無情にも實現す。()曰く溪聲即是廣長舌と、然れば即廣長舌相獨り諸佛のみ之あるに非ず。衆生にも之あり。即ち萬象有り。是故に情と無情と融して一舌と爲。舌即法界法界即舌、遍覆を説とき已に雙極と成。

十方世界何處へ往くも、()千聖萬佛興るとも無量光壽の客體に同化せよと云ふ外に宗教の建立すべき(道)理や外にあるべきぞ。活眼あるものならば是を外にして説くは邪師()論にあらざれば未發達の宗教のみ。

誠實言とは、誠實は必ず信すべきを明す。是を以て廣長の舌端に誠實の語を出す。誠實の言とは彌陀不可思議の功德所謂無量光壽に歸化すべき理は是圓滿なる宗教にして此理を離て畢竟完全なる宗教あるべきなし。亦其彌陀の實體眞理は法界に周徧して充ざる處なし。此眞理を如實に言に詮表するを誠實の言を云。假令千聖萬佛交代に興出しても此眞理を易ふること能はず。是眞理如實言なるが故に。汝當に諦に信ず、疑を懷ことなかれ。

護念とは(蓮池)念佛の人佛力保護して其をして安穩ならしむ。諸の障難無きが故に。佛心の憶念は其精進を念じて退墮有こと無が故に。觀經に云、念佛衆生攝取不捨。又經に云、念佛の人には阿彌陀佛常に其頂に住す。此文妙なり。念佛する人には腦中に常に佛在が故に神靈正義慈悲の光を放ちて此人を指導す。豈過患を除かざらんや。

護念とは本來諸佛は無念の念にして時として念せざるはなし。處として遍からざるなし。佛陀神靈の念は譬は太陽の光の普く照るも衆生に眼なき時は無が如し。眼此光

の中に在て故に我を照し我を護る殊なることなし。また譬へば大明鏡あり。之を磨く時は常に外境宛然として炳現す。外境故に入來るに非ざれ共常に來て顯はるが如し。諸佛同一根底の中に人ありて心眼開發すれば諸佛常に心中に炳現す。諸佛の知見も又然り。時として護念せざるなし、護は心中に炳現して擁護す。念とは彌陀の心光の神靈正義慈悲智慧が自心に炳現して我を嚮導したまふ處なり。自ら正義の觀念現せざるは心の珠曇りたるなり。神慈の實現せざるは心の鏡曇りたるなり。自己は捨離すれ共彼のみ擁護したまふらんと、(過)境的に付して瞭然と意識し來るに非ざれば幼稚なる未開的宗教意識なり。

阿闍鞞佛より已下諸佛の名字不可説ならん。要解に、佛に無量の徳あり。無量の名あるべし。機に隨て立つ、或は因を取り或は果を取り或は性或は相或は行願等一隅を擧といへども仍四悉を具す。一々の名に隨て所詮の徳を顯はす。劫壽之を説くも悉すこと能はず。

實を剋して論すれば、十方無量諸佛の名字即ち彌陀の徳を表顯す。彌陀の徳無量なる故に無量の世界に無量の身を表はし無量の名を顯はして其功用を顯はす。然即ち廣長の舌相を出して誠實を證するのみならず、諸佛三業四威儀悉く彌陀の實在を現して證明するなり。無量の身無量の名も悉く阿闍鞞佛即ち無量の義を顯はす爲なり。

暫く二三の名字を以て其徳を詮せば阿闍鞞此には不動と云ふ。佛法身不生不滅無去無來湛然常住如々不動なるが故に須彌相とは佛の相好妙高にして能く及ものなきが故大須彌とは佛徳廣高にして大須彌の如きか故に。須彌とは印度に於て古代より八萬由旬の四寶合成の山ありとの表示的に衆生の意識に想像せるが故に譬説に用ひたるなり。

舍利弗於汝意云何……當信受我語及諸佛所説

此經獨り無上の心要を詮す。諸佛の名字並に無上圓滿究竟萬徳を詮す。故に聞者皆諸佛の爲に護念せらる。經は能詮にして名號は所詮なり。故に經を受持するときは自

ら其所詮の眞理彌陀を受持するなり。彌陀を離れて經なきが故に、經に依て彌陀を詮すが故に、諸佛悉く彌陀の分身なるが故に、其根底即彌陀の故に、諸佛は是彌陀の個體にして個體本彌陀なる故に、護念せられて不退轉を得ることを忘るべからず。

客觀的過程。是一切衆生を三世常恒に濟度の過程なり。一切を悉く度脱の法界等流の此眞理は有佛無佛恒相當住にして常然として等流すれども、之を諸佛は覺悟して之を意識的にしまた衆生に勸めて意識的に信受せしむ。牟尼が此界に興出して此彌陀の實在をさとりまた衆生に教へて信せしめ一切の諸佛も各其國に於て衆生を勸發して信せしめ常恒不斷の濟度過程なり。

濟度過程は終局目的世界の秩序の照鑑的實現として不誠意識に拘らず、一切諸佛に護念せらるるとは、法界等流として彌陀の眞理の法界に周徧し實在せざるなきも、人佛即ち先覺者興出して之を示すに非ざれば、衆生の意識に上すことなし。此法界等流の法門、或は經卷となり、或は所謂住持三寶同體列體の三寶等は(以下斷絶)

昭和四年八月十五日印刷
二十日發行

年七冊制は廢止

年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨成
發行人

東京市小石川區諏訪町五五

印刷人 小林 七太郎

電話小石川一四九五

發行所

東京市小石川區水邊二ノ四四

ミオヤのひかり社

振替東京六八五一番